

或る日の花山

???

去年の春から花山へ登るのは、これでは二十回以上にもならう。今度は、先頃、山で同席した草場氏に関する新聞記事を思ひ出乍ら山道を急いだ。

草場星圖氏——半月前の總會で御目に掛つてから二三夜を経た或る朝、草場氏の名は忽ちにして津々浦々まで響いた。

「目を覺ますと、いつの間にか世は舉つて私の名を口にして居るのだ！」。これは正に草場氏に適用さるべく豫て詩人バイロンが用意して置いた言葉でもあらう「世界一」と云ふ讃辭を「ルンペン」といふ焦點にピタと合はせた手際は流石にチャリリズムである。大風一過、種無き新聞としては思ひも掛けざりし大ヒットであつた。斯くして、

一、新聞は賣つた。

二、苦學者は報ひられた。

三、世道人心は益せられた。

ひとり山本一清博士のみは淋しく殘されたのではないかとにかく、恐らく「世界一」の一語のために！これをルンペンならぬ「ルンペン」にくつつづけたのは新聞の罪だ。然し世に恐るべきはインテリゲンツィアの群れではある。纏つて私共は山本博士に對する滿腔の同情と信頼を持ちながら上記の如く一夕花山へと足を運んだのである。

花山天文臺——恰度私の住む町では市民祭で大騒ぎをして居たが、四十哩を距る此山からはそれらしい何物も見ない。

山へ來て先づ御なじみの圖書室に入れば正面左手に臺長が懇然と机に頑張つて居る。小さい鞆と星圖らしい物を前に置いて、例によつて無愛想に吾々を迎へる。脇には稻葉主事がうやうやしく手をついて、何やら二重星觀測とシリイダのこゝろらしい話を申上げて居る。まさに「敵艦見ゆ」の報告である。私共も幾分緊張

六 甲 藎 部 進
藎 部 守 子

を覺える。

柴田慧星氏は獨房に閉ぢ籠つて計算か書見か、何れとも分らない。小山變星氏は自室から出て、又入つて行つた。乾板の準備でもして居るのか。

地下室に公文掩蔽氏を訪ねると1935年中の六等星以上のもの約六十餘個の豫報を算出した表を見せた。それが惜しいと見えて其儘御借せしやうとは云はない。Handbuch der Astrophysik 第六卷の或る個所に就て一寸聴かされた。高城天文時計氏は氣の毒にも編輯發送で忙しい。私は來年度の年鑑編輯に對する希望を述べて辭した。

一方ドームの中では誰やら黒い影が黙々として觀測中。邪竈にならぬやう靜かに退出した。

月の無いほんとうに晴れ渡つた星空だ時折り來て見る此山には、草場氏に優るとも劣らぬ努力の人々が、寒さも睡寢も物とせす、時に家族を殘し、兒を忘れ、ひたすらに真理を求めて苦念する。空は曇つても又晴れぬとは限らず、交々夜の明るるを惜しみつゝ黙々として働く。而も、これは誰にも頼まれた仕事ではない。又、氣まぐれのアマチュア趣味とは事が違ふ。

特に此半歳ばかり來る度に見る山上の空氣には思はず頭の下るを覺えるが、今宵もまた同じ思を持ちながら、私共は星の明りをたよりにして、此等の人々が暗夜にも通ふなる十八町の道を下りて來た。

此處は明るい街で、餅菓子四つ五つ、家に待つ兒の爲めに買ひ求め、吾等も亦黙々として、下り三等車の中に身を坐えた。

(故里にては神有月なる七日の夜半)